知られざる 土木の世界

私たちが普段何気なく使っている道路や橋、トンネル。
これらは私たちの生活を支え、快適さをもたらしてくれます。
しかし、あまりに身近な存在であるため、
その裏側にいる人たちのことを忘れてしまいそうになります。
11 月 18 日は土木の日。
土木について、そして土木を支える人について考えてみませんか。

2023 年 11 月号
public relations magazine No.226

今月の主な内容・CONTENTS

03 知られざる 土木の世界
12 鉄道ものがたり
14 Aso Photo
16 令和 4 年度 決算
20 子育て情報
22 Hot Topics
24 くらしのインフォメーション
28 お慶び ご寄付
29 阿蘇医療センター通信 #94
30 人 種 作 文
31 令和6年4月採用 市職員募集
32 まちのわだい
33 Photo Report
34 図書館へ行こう！
35 地産地消 Cooking！
35 おたより
36 11 月カレンダー

Cover Story
表紙のはなし

二重峠の石畳から望む雲海。石畳について詳しくは4ページ。

夢を追いかけて

私の両親は農家をしています。毎日、朝早く起き夜遅くまで仕事をしています。そんな中でも、お父さんやお母さんは僕を学校や塾などに送ってくれます。僕はそんな両親の様子を見て、両親を少しでも楽にしてあげたいと思いました。そこで僕は、今よりも便利な家電などを開発し、両親だけでなくいろんな人々の暮らしを良くしたいと考えました。そのような仕事に就けるように、夢を見失わず努力していきたいです。また、私は今、生徒会長として生徒会活動に力を入れています。残された任期は残りわずかですが、最後の時まで波野中学校をよりよくするために試行錯誤して頑張っていきます。

志賀　征軌　しが　まさき
波野中学校・3 年

土木がつなぐ過去と現代

阿蘇に残る石畳は参勤交代の足跡を伝える歴史の道。今でも地域の人々が守り続けています。

石畳の除草作業を行う車帰区の住民。きつい勾配を除草剤の入った10キログラム以上あるタンクを担いで歩く。

阿蘇市の最も西に位置する車帰地区。北側復旧道路のインターチェンジもある阿蘇の玄関とも言える場所に二重峠の石畳はあります。車帰地区と二重峠を結ぶこの石畳は、熊本と大分間の豊後街道の一部として江戸時代に整備され、参勤交代にも用いられました。水害や地震にも耐え、現代にその歴史を伝えています。

道を支える住民たち

二重峠の頂上から120メートル程下ると「岩坂村つくり」と刻まれた敷石があります。他に地名の残る石は見つかっていません。なぜこの文字が刻まれたのかは不明ですが、この区間では岩坂村（現在の大津町）の住民の何らかの負担により石畳が整備されていたことがうかがえます。

現代の石畳は、車帰地区の住民が管理しています。10月上旬には、地区の7人で除草作業が行われました。区長の中村勲（いさお）さんは「高齢化もあり大変な作業ですが、どこにでもあるわけではない貴重な財産を次の世代に残していくためにも続けていきたい」と話しました。

変わらない思い

地元で建設会社を経営する島村公章（ひろたか）さんは「建設機械もなかった何百年も昔に、人力で石を割ったり運んだりしてあれだけのものを作ったことはすごい」と話しました。さらに、現代では機械化や技術革新が進んでいるとしたうえで、「根底にある人々の安全を守るという思いは、今も昔も変わりません」と強調しました。

長きに渡り旅人の安全を守ってきた石畳。土木技術が進化しても、その基本的な思いや価値観は変わりません。過去と現代、両方の時代をつなぐ石畳は、その象徴とも言えるでしょう。

ここがすごい

造ったのは あの石工集団

橋のたもとに「棟梁 石工卯助」と刻まれているとおり、建造したのは卯助。通潤橋を建造した丈八の兄。

卯助は最後の一石を頂点にはめるとき、その真下に正座していたと伝えられている。

— 阿蘇に残る土木の歴史 1 —

天神橋（めがねばし）

一の宮町坂梨の平保木川にかかる石橋。市指定有形文化財（建造物）。約100個の石がみごとなアーチをえがいている。

ここがすごい

みごとな土木技術

石畳の要所には雨季などの山水による敷石の流出を防ぐために石畳を横切る排水溝「水切り」を造り、流れてきた山水を流すようになっている。側溝も設けられ、水切りからこの側溝に流れるようになっている。豊後街道の石畳でも珍しい施設。

— 阿蘇に残る土木の歴史 2 —

二重峠の石畳

二重峠の頂上から麓の坂の下集落までの約1.6キロメートルにわたり幅約3メートルの石畳が敷き詰められている。国指定史跡。

土木がつくる便利な暮らし

土木は生活を便利にしてくれるもの。工事中の滝室坂トンネル（仮称）について紹介します。

つづら折りが続く滝室坂の頂上。この東側にある集落に住む中学生は滝室坂の峠道を通るたびに「早くトンネルができないかな」と考えていました。曲がりくねった坂道で車酔いすることも少なくなかったからです。

最新技術でトンネルを

そんな思いを現実にするのが、波野大字小地野と一の宮町坂梨を結ぶ滝室坂道路です。そのうちの約4・8キロメートルのトンネルがことし6月に貫通しました。今後、開通に向けて道路の舗装や設備の工事が進められます。

滝室坂トンネル（仮称）は阿蘇の外輪山を貫くトンネルです。外輪山は、約45万年前の先阿蘇火山岩類の上に、過去4回の噴火で発生した火砕流堆積物や火山灰で形成されており、硬い層や柔らかい層が交互に重なるなど非常に複雑な地質です。「形成された年代で地質は異なり、地質に応じた施工が求められました。トンネル全線で綿密なボーリング調査を行い、地質を予測・把握しながら慎重に掘削を進めました」。熊本57号滝室坂トンネル東新設工事作業所長の田端大人さんは工事について振り返りました。

トンネルへの思い

トンネルの開通で事故や災害による通行止めの発生リスクが低減されることが期待されます。「地元の皆さまの期待は大きいと感じます。最後まで全力を尽くしていきたいです」と話す田端さん。土木技術と技術者の思いが私たちの生活を便利にしています。

土木がまもる豊かな暮らし

災害時に真っ先に現場に駆けつける建設業者たち。
彼らの果たす使命とは―。

震度6弱の揺れが阿蘇市を襲った平成28年熊本地震。森本剛志（たかし）さん宅も大きな被害を受けました。「自宅は半壊し、家の中もぐちゃぐちゃでした」。それでも森本さんには自宅の片付けをする時間はありませんでした。森本さんは市内で建設会社を経営しており、翌日には地震の被害を受けた現場を走り回っていたからです。

被災直後は、通行ができなくなった道路を通れるよう復旧作業にあたりました。道路の復旧後は続けて亀裂の入った堤防の復旧作業へ。さらなる被害を防ぐため、梅雨を前に被災した堤防を復旧させる必要がありました。こうした復旧作業には、他の従業員も現場に駆けつけました。もちろんそれぞれが被災していました。「建設業をしている以上、それは使命ですから」。

建設業の使命

建設業の使命とは―。「市民の安心・安全を守ること」。森本さんは力を込めました。私たちの安全を脅かす災害は地震だけではありません。大雨が降れば倒木の撤去や道路の通行止めを示すバリケードの設置。大雪が降れば朝5時から道路のパトロールと除雪材の散布をします。大雪の予報が出れば前日から準備をするという森本さん。未明からの作業は寒くないのか尋ねると「そりゃ寒いよ」。優しい笑顔で答えてくれました。

私たちの日々の暮らしの陰で、土木に携わる人々の昼夜を問わない努力があることを知らなければなりません。

土木と野球の二刀流に挑む

ことし9月、阿蘇地域の建設会社が設立した軟式野球チームが全国大会に出場しました。
なぜ建設会社が野球に取り組むのか。建設業界の未来に関わる深い理由がありました。

「求人を出してもなかなか若い人からの応募はなく、就職してもすぐに退職してしまう人も多くいます」。市内で建設会社を営む社長は嘆きました。社長のことばは現代の建設業界の厳しい状況を示しています。

私たちの便利な生活をつくり、豊かな暮らしを守る建設業。今、人手不足に直面しようとしています。高齢化が進む中で、若い人の採用が減っていけば、業界全体が立ち行かなくなります。

会社の垣根を越えた挑戦

こうした状況を打破するため、建設業界の魅力向上を図ろうと結成されたのが軟式野球チーム「ACBT（アソ・コンストラクション・ベースボール・チーム）」です。阿蘇地域の建設会社5社が共同でことしの春に結成しました。社会人になっても野球を続けたいと考える高校球児たちの受け皿になることで、建設業界に新戦力を呼び込むのが目的です。

仕事と野球

チームで投手を務める川上純（じゅん）さんは、市内の建設会社社員として滝室坂トンネル（仮称）の工事に携わっています。「品質・安全に気を配り、任せられた仕事には責任感を持って取り組んでいます」と話す川上さん。

川上さんは高校時代、甲子園を目指して日々練習に励んでいました。卒業後は大学で野球を続けることも考えましたが、地元阿蘇での就職を決断。今の会社に入社しました。

「高校は普通科だったということもあり、入社当初は専門的な知識がなく、現場で仕事をしていく中でとても辛い思いをしました」と振り返る川上さん。そんな川上さんを支えたのは、仲間と続けてきた週末の草野球でした。だからこそ、川上さんは野球の力に期待を寄せます。「何か楽しいことがないと仕事も辞めたくなってしまうので、野球を通じて楽しみを増やし、長く働ける建設業界になっていけばいいと思います」。

大きな目標

チームはことし6月の県大会で優勝すると、7月の九州大会で全国大会出場を決めるなど好成績を残しています。目標は県内に9チームしかないA級への昇格。一方で、より大きな目標についても語った川上さん。「他社の人たちと交流を深めながら阿蘇の建設業を盛り上げていきたい」

建設業界で働く人に聞きました

人手不足が懸念される建設業界。かつては「きつい」「汚い」「危険」の「3K」業界とされてきました。
今の建設業界はどうなのか。実際に働く人に聞いてみました。

Interview　女性も耀ける仕事です

市内の建設会社で働き始めて2年目です。男性が多い職場ですが、その点で不安はあまり感じませんでした。実際に働いてみて、ハラスメントなどもなく女性だから働きづらいと感じることは全くありません。ICT化、省力化も進んでおり、書類作成などの事務作業もあるため女性でも活躍できる仕事だと思います。

今は砂防ダムの建設に携わっています。中学生のときに水害、高校生のときに地震を経験したこともあり、人の命を守る仕事をしたいと考えていたので、今の仕事には誇りを持っています。

谷﨑　絵美里（えみり）さん

Interview　子どもに誇れる仕事です

建設会社の社員として北側復旧道路二重の峠トンネル工事のほぼ全ての工程に携わりました。地元でもあり、国道57号の迂廻路の不便さは自分でも感じていたので、一日でも早く通すために特に安全には気をつけました。開通後に「あそこが通ってよかった」と言ってもらえたときに、がんばってよかったと思いました。建設業の醍醐味だと思います。トンネルを通るたびに、娘に「ここはパパが造ったんだよ」と言っています。最近は娘も「ここパパつくった？」と聞いてきます。今後ずっと誰かに語れるものを造ったんだなと感じます。

森　光康（みつやす）さん

次世代へ
受け継がれる思い

建設業者と地元の若い力による
新たな挑戦を紹介します。

「もう少し速く動かしたほうがきれいになるよ」。打設したコンクリートをならす作業をする生徒たちに、現役の建設会社社員からのアドバイスが飛びます。アドバイスを聞きながら慎重に作業を進めていく生徒たち。9月8日、阿蘇中央高校グリーン環境科環境デザイン類型3年生のコンクリート打設実習のようすです。

この実習は、普段授業で生徒が学んでいることを実践するために同校が初めて企画。雨でぬかるんで牛の出入りが不便になる牛舎の出入口付近の改善のためコンクリートで舗装するというもので、阿蘇地区建設業青年部がボランティアとして協力を申し出ました。

7月には同青年部の助言のもと現場を測量し、施工の手順や必要な材料を確認。9月のこの日は、土を掘り起こし、砕石を入れた後、小型の機械で地盤を固めてコンクリートを流し込みました。生徒たちは7月にショベルカーの操縦に必要な「小型車両系建設機械運転特別教育」を取得。実習でも真剣な表情でショベルカーを操縦していました。

実習には阿蘇郡市の建設業者21社が参加。同青年部の井英樹会長は、業界の課題として若手人材が不足していることを挙げ「技術を継承していくために若い人に業界に入ってもらうことが必要」と話しました。

小型の機械で地面を固める

ショベルカーを操縦し、土を掘り起こす生徒

こんなこともしています

令和4年12月2日、熊本県建設業協会阿蘇支部と阿蘇地区建設業青年部が、波野小敷地内の舗装作業とグラウンドの整備作業を行いました。建設業の魅力発信と地域貢献を目的に阿蘇郡市内の学校で実施されています。

バックホウやローラー車など建設機械の操縦体験も行われ、参加した児童は「初めて操縦した。楽しかった」と笑顔を見せました。阿蘇地区建設業青年部の井英樹会長は「喜ぶ子供たちの姿を見ることができてよかった」と話しました。

▲初めての建設機械に緊張したようすの児童

▶舗装作業に見入る児童

繋がる思い

井晴樹さんは「授業ですることのないことができて勉強になった」と実習を振り返りました。

晴樹さんは、建設業界への就職を目指しているといいます。きっかけは「熊本地震で被災した自宅の農地を地元の建設業者に復旧してもらったこと」。晴樹さんはさらにことばに力を込めました。「土木の大切さを知り、自分も土木で地域に貢献したい」。

その思いは確実に次の世代へと受け継がれています。

コンクリートを流し込む

流し込んだコンクリートを丁寧にならす